

経済振興委員会報告資料

福岡城天守台調査の経過報告について

令和 8 年 2 月
経済観光文化局

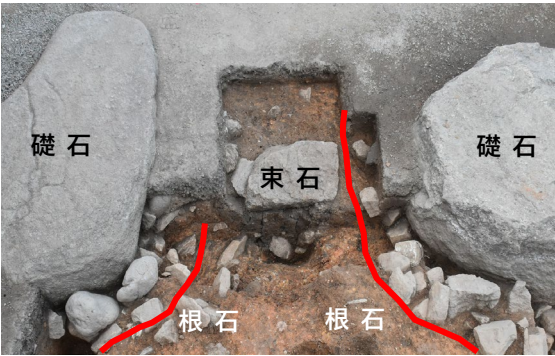
福岡城天守台調査の経過報告について

今年度実施した福岡城天守台発掘調査の経過と今後について報告するもの。

1 調査経過（続報）

【その1】東石とみられる建物基礎を確認した。

- ・礎石と礎石の間から、床下を支える柱の基礎である束石（つかいし）と考えられる小さな平石1点（長さ約30cm、幅約20cm）が見つかった。
- ・これは、天守台内側（穴蔵（あなぐら）部分）で、床組（ゆかぐみ）などの建築工事が行われていた可能性を示すものである。



〈 礎石・束石・根石 〉

礎石（そせき）：建物の構造を支える柱の基礎。

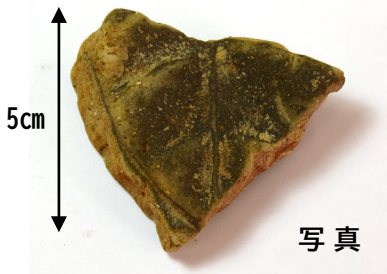
束石（つかいし）：床などを受ける横木など、建物の構造材を支持する短い柱の基礎。柱と柱の間で、必要に応じて荷重補助するもの。

根石（ねいし）：礎石を安定させ、沈下を防ぐ石。

〈建物基礎のイメージ〉

【その2】桐文（きりもん）の瓦が出土した。

- ・今回の調査では、前回報告した巴文瓦に加え、桐文を持つ瓦も出土した。本市では他に名島城（東区）で見つかっており、福岡城の桐文瓦は、名島城解体後に持ち込まれ、建物の創建時に再利用されたものと考えられる。



〈 桐文瓦 〉

豊臣秀吉が家紋として使用した桐文がデザインされた瓦のこと。大和郡山城（奈良県；豊臣秀長）や名護屋城（佐賀県）など、豊臣政権とのつながりがある城で使用されている。

【参考例】

名護屋城出土



〈 名島城 〉

豊臣秀吉から筑前国を与えられた小早川隆景・秀秋の居城。新たに国主となった黒田長政も初め居城としたが、慶長12（1607）年の福岡城完成と移転に伴い、廃城となった。その際、石垣や建物を福岡城に運び込んだという（これを「名島引け」という）。

【今後の予定】

- 出土した遺物や束石などの遺構は、今後有識者の意見を伺いながら、分析と関連資料の調査を実施する。
- 発掘調査は今後、測量調査・石垣調査・地盤調査とあわせて、成果の取りまとめを行なう。

2 これまでに寄せられた文化庁・有識者の見解

- 文化庁調査官が、発掘現場を視察し（令和7年12月25日）、以下の助言をいただいた。
- ・礎石や束石は、江戸時代のものと判断できる。
 - ・史跡保護を考えて、調査は最小限の範囲で行われているが、今回の目的である天守台の構造を明らかにするためには、調査を部分的ではなく広い範囲で実施する必要がある。
 - ・調査区の一部を深く掘り下げて、しっかりと地層の確認を行なうべきである。
- その他、各専門分野の有識者から、以下の意見をいただいている。
- 【考古学】 今回の調査で、礎石や束石が江戸時代のものと確認できたことは重要
天守台の地層を精査し、その構築過程を明らかにすべき
- 【地質学】 調査が細切れでは、地層の判断は難しい。穴蔵全体を通して観察する必要
- 【建築学】 柱の配置は、穴蔵の構造を知る上で大変重要。その他の束石を確認すべき

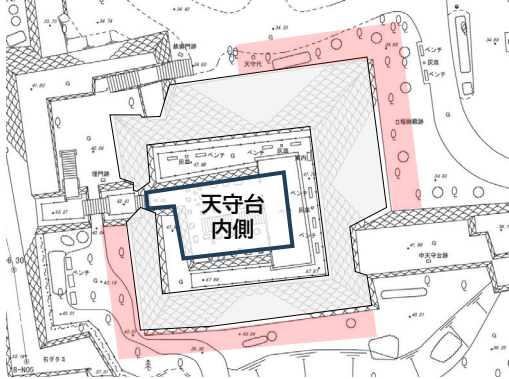
3 令和8年度の調査計画

- (1) 天守台内側（穴蔵部分）
- ・令和7年度調査では、かつての状況を明らかにするいくつかの成果を得たが、調査範囲が最小限であり、さらなる学術的知見を得るため、文化庁・有識者の見解をふまえ、より広範囲の調査を実施。
 - 【予定】 今後、発掘調査の実施について、文化庁と協議（令和8年3月まで）
協議が整い次第、文化庁へ現状変更許可の変更申請を提出。許可後に発掘調査を開始
 - 【目的】 遺構・遺物をさらに確認し、天守台内側のかつての状況を明らかにする
発掘調査により地層を精査し、天守台の構築過程を明らかにする
- (2) 天守台外側（石垣裾（すそ）部）
- ・当初計画の通り、文化庁の許可に沿って調査を実施。
 - 【予定】 令和8年5月頃から発掘調査を開始
 - 【目的】 関連する遺物を採取するとともに、天守台石垣の構造を明らかにする

(1) 天守台内側 調査範囲



(2) 天守台外側 調査対象地



※調査は上記範囲の一部
※今後の協議等により、調査範囲は変更する可能性があります。